

比較思想とは何か

三枝 充 憲

比較思想研究はいまなお模索の時代にある、とわたくしは考える。以下に個条書きに提示するのは、とりあえずの私見であつて、多くの同学者の批判を俟つ。

- (1) 比較思想は、その英訳名あるいは原名 comparative philosophy の示すとおり、あくまでフィロソフィでなければならぬ。ただし哲学という日本語は、約百年の伝統のあいだに、ある限られた枠をはめられているために、そしていわゆる哲学だけではないくて、宗教・倫理をはじめ、世界観・人生観、そして習俗や伝統や諸意識など、また感性の世界や、以上のもろもろのものの基層をふくめるために、思想の語を用い、比較思想と呼ばれる。
- (2) そのフィロソフィは、フィロソフィーレンに緊密に結びつく、結びつかなければならぬ。ここでいうフィロソフィは、(1)に述べた広義のものであり、いわゆる哲学者のみの専有物ではない。万

人すべてそれぞれのフィロソフィをもっている。そしてそのフィロソフの主体性が、比較思想に貫かれていなければならぬ。ただし実際には、すべてのひとに比較思想研究を強制しようというのではなく、一部の限られたひとにのみ、その研究が委ねられることは、むしろ当然といえよう。

- (3) 比較思想研究において、諸思想の比較をおこなう場合、ある意味において、諸思想を対象化して、いわゆる科学的に処理するケースもありうる。しかしそれはひとつの形態としてありうるのであって、何故に多くのなかからとくにその諸思想をとりあげたのかという選択のなかに、すでにその研究者の主体性がある。それがフィロソフィの本質を形成する。(研究者はそれをその論述に浸透させなければならず、批判者はそれを見抜かなければならない)。比較思想は決して諸思想の博物館・陳列館ではない。

(4) 比較をおこなうのは、研究者の意識の最深部においてであつて、とくに比較思想を名乗らない場合もある。すなわち、自覚的な比較思想と、いわば無意識の比較思想とがある。後者を明らかにすることが、前者の研究のひとつともなりうる。

(5) 比較とは、ごく簡単にいえば、共通ないし類似と相違ないし異質との両方を明らかにすることにある。前者の parallel のみでは、比較は完成しないし、研究者は満足しない。両者が果たされた研究は、また対比 (contrast) とも呼ばれる。しかし比較思想には、このほかに、交流・影響などの研究、そしていわば全体を包括する世界思想史があつて、すでに各々に幾つかの貴重な成果が知られている。この三つの類型は、それぞれ尊重されなければならず、どれかひとつに限定すべきではない。そのことが比較思想研究者すべてに自明となる日が俟たれる。

(6) 思想は現在までに長い歴史をもつ。思想を学ぶものは、その歴史を、もとよりその全部についてその細部にまでいたることは、困難、いな、不可能ではあるけれども、必ずそのなかに入つて行かなければならぬ。しかも思想は、西洋に哲学また宗教などとしてあつた、ある、それだけではなく、同じように、東洋にもさまざまな形態においてあつたし、ある。それら東と西とから学ぶ思想家は、比較思想研究者の列につらなる。

(7) たゞ比較思想研究を志す場合にも、みずからに、東西いずれか、そしてそのうちのかなにかある部門について、それ相当の深

い知識をもち、いわば専門を据えて、独自のよりどころないしベースを有することが、ぜひとも必要である。そしてその研究は、たんなる思いつきによる軽薄なくらべあいではなく、いわんやザロンの談論ではなくて、充分なる論証をともなつた討論でなければならぬことは、更めていうまでもない。

(8) こうして比較思想は、もしも世界哲学ということばが許されるならば、その立場にあつてフィロソフィーレンをおこなう学問である、ということになる。もとより、世界哲学とはひとつのイデーであつて、まだ実在してはいない。しかしながら、みずからそのイデーをめざし、同時に、たえずみずからを反省し検討しながら、広汎な学的探究心と嚴密な学的処理とによつて、そのイデーを現実化しつつ、それによつて、世界の諸思想(の一部)に關してフィロソフィーレンを果たし、かくして自己のフィロソフィを築いて行く。ただしそこには、いたずらに性急なゴールはない。(たんに結果だけを問題とするのは、フィロソフィそのものの無知にもとづくことを、よく自覚し、そこにおこなわれるプロセスのすべてが提示されるべきである)。また万人に普遍的な方法論も、いまだ明瞭ではない。みなその研究者の主体が、選びとり、決定し、築き、また崩し、そして樹立する、その反復が続けられるであらう。

(さいぐさ・みつよし、比較思想・仏教、筑波大学教授)